

# 大豆近況 VOL.162

団体会員  
一般会員 各位  
賛助会員  
協賛企業

関係部署にご回覧ください。

令和4年5月2日  
一般財団法人 全国豆腐連合会  
会長 東田 和久  
相談役 郷 和平

「大豆近況」をお届け致します。是非、ご活用下さい。

## ○北米産大豆

米国農務省が4月8日に発表した、2021/2022年度の米国大豆需給予測によりますと、生産量は1億2,071万トンと前月から据え置かれていましたが、輸出の増加と種子利用の微増を受けて総需要量が増加したことで、期末在庫は707万トン(在庫率5.8%)に下方修正されました。また、世界の大豆生産予想は、ブラジルとパラグアイで前月に引き続き下方修正されており、前回は0.9%減の3億5,072万トンに下方修正されました。これを受けて世界の大豆の期末在庫は、0.4%減の8,948万トンに下方修正されております。

なお、同省が3月31日に発表した、2022年産農産物の作付け意向調査によると、大豆の作付け意向面積は、前年比4%増の9,095万エーカーと過去最高水準となっております。昨今の肥料価格高騰を受けて農家の生産コストが大きく上昇している中、より多くの肥料を必要とするコーンの作付けが減少し、大豆にシフトしたと見られています。ロシアによるウクライナ侵攻に伴う原油高を受けたエタノール需要により再びコーンへ戻る可能性もありますが、産地の寒冷な天候と土壌水分過多によりコーンの作付けが著しく遅れているため、大幅なシフトバックは考えにくい状況です。

一方、2021年産大豆の入港状況ですが、依然として大幅な遅れや船積みキャンセルが横行しており、一向に改善の兆しも見られず、混乱を極めている状況です。入港直前に踵を返して中国へ向かう悪質な抜港もあり、一部では既に原料切れが発生しているとの噂も耳にする状況となっております。今後の更なる在庫ひっ迫が大変懸念されております。

4月のシカゴ相場は、期近5月限が\$16.20/ブッシェル付近から始まりました。米国産大豆の作付け意向面積の発表で大豆の生産増が期待され、また、上海でのロックダウン延長を受けて大豆消費の鈍化が意識されたことで月初は大きく下落致しましたが、前述の農務省需給予測でブラジルの生産高が大きく下方修正されると、コーンや小麦、大豆ミールと共に大豆も一気に買い直され、\$17の壁をあっさりと突破し、\$17台半ばまで急騰する展開となりました。下旬にかけ

では、新型コロナ感染拡大による中国の大豆輸入鈍化が再認識され、売られやすい状況になりました。また、輸出が活発化する時期にある南米産大豆との競争力が急速なドル高により低下するとの見方も売り材料と評価され、相場は一旦下落に転じました。しかし、ウクライナ侵攻を受けて食糧価格が急騰する中、パーム油の輸出シェアの半分以上を占めるインドネシアが内需優先を理由にパーム油の輸出禁止を発表したことで、ひっ迫する植物油の需給がさらに引き締まるとの懸念から再び上昇し、4月28日現在、期近5月限が\$17.26/ブッシェル付近にて推移しております。

4月の円相場は、1ドル=121円半ば付近から始まりました。序盤から米国の金融引き締め加速観測や原油相場の上昇を受けて米長期金利が上昇し、日米の金利差拡大観則から一段と円安が進みました。4月下旬には約20年振りの円安水準に達し、一時129.40円付近まで円安を更新しました。時折、急激な円安進行を牽制する政府要人の発言や米長期金利上昇の一服感、日米における協調介入に関する議論の一部報道を受けて、円が買い戻される場面もありましたが、主要通貨に対する円安とドル高の流れは非常に強く、ほぼ一方的に円安ドル高が突き進む展開となっております。

4月28日現在、1ドル=130円台半ばまで上昇しており、非常に大幅なコストアップとなっております。

## ○国産大豆

令和3年産国産大豆の第5回入札取引が4月20日に実施され、全国で約6,714トンが上場され、落札率は88.9%でした。前月まで殆どが不落だった北海道産の納豆銘柄ですが、大半が落札されており全体の落札率を押し上げております。潮流が突然変わった背景は不明ですが、今後の動向が大変気になるところです。平均落札価格は、普通大豆:¥9,787/60kg(前月比△¥345)、特定加工用:¥9,349/60kg(前月比+¥301)で全体の落札価格は¥9,696/60kg(前月比△¥206)の結果となりました。北海道産とよまさり銘柄と東海・九州の銘柄は、引き続きしっかりした価格を維持している状況です。次回は5月18日に約5,700トンの上場が予定されており、相場の一段の落ち着きに期待したいところです。

以上